

占いに関する書物の需要が高まった。「東方朔」や大雑書は、その先駆的なものであった。幕府の天文方が制作した暦も、種々の暦注を満載していたゆえに、庶民の暦注への関心は、近世を通じて持続して、膨大な暦注や暦占いに関する書物を生み出していった。このような流れを念頭におけば、著者の研究は、「陰陽道」の民俗学的研究ではなく「暦」の民俗学的研究として理解すべきである。

本書を読み、著者がいかに民俗学の立場を維持して、民俗学の王道を歩んでいるかということ、民俗学の外に自らを投企して、広い学術の世界（とくに日本史学、文学研究）との交流に身をさらしてきたのかということを知ることができた。相反する志向性が本書にも刻印されていて、斬新さと古風さ、王道と周縁、過去と現在がせめぎあっている。暦占い、暦注の知識がもつ文化的な意義を確認させた点で、そして書物の民俗化というコペルニクスの転換を、身をもって示した点で、本書の価値は限りなく大きい。あとがきにおいて本書は、恩師である宮田登に捧げられている。宮田に学び、宮田民俗学をこえた研究者として著者の名前は、民俗学の長い歴史に刻まれることになる。

川村清志著

## 『クリスチャン女性の生活史』

——「琴」が歩んだ日本の近・現代——

青弓社 二〇一一年一月二二日刊

四六判 二九二頁 二〇〇〇円＋税

川 又 俊 則

キリスト教研究者ではない著者が非宗教出版社で一般向けに刊行した本書を、『宗教研究』誌「書評と紹介」欄で取り上げるとは、たいへん喜ばしい。評者に任じられたことを光栄に思い、微力ではあるが、以下の記述を持って任を果たしたい。

序 章 ライフヒストリーという物語

第1章 出生から入信まで

第2章 信仰結婚

第3章 牧師の妻

第4章 戦争の闇、栄の出征

第5章 夫の死、新たな出発

第6章 老いの足跡

終 章 祈りの果てに

これが本書の章立てである。第1章から第6章にかけて、ある個人（丸山琴）の生活史が丁寧な描かれた本編と、方法論の

議論やキリスト教各教派等の説明をした序章、そして最晩年を簡潔に記した終章から構成されている。序章の一部および第一章から第四章までは、著者の勤務校の紀要『比較文化論叢』（札幌大学文化学部紀要）第二十一―二十二巻（二〇〇七―二〇〇八年）に掲載された内容に、加筆修正がなされたものであり、第5章、第6章および序章の一部は、本書用に書き下ろされたと思われる。

丸山琴という一人のキリスト教信徒が本書の主人公である。彼女は近現代日本を一世に亘って生きた。彼女および親族等関係者への聞き取り、彼女や夫が書き残した文書、教会関係文書等が主たる資料である。それらをもとに彼女の人生の軌跡が丁寧に記述されている。主に名古屋と奈良で過ごした彼女の生活史を見ることは、同時に、地域や社会状況、そして、大正・昭和・平成の日本キリスト教史にかかわる様々な状況が垣間見ることが可能である。関連写真も適切に使用され、その時代背景がうかがい知ることができる。

本書の概要（琴の生活史概略）を述べ、その後、評者の視点による本書のポイントに関する若干の解説を述べたい。

一九〇七年、佐伯琴は十三人兄妹の末っ子として、奈良市の商家に生まれた。誕生日・出生順・十三の弦「琴」にちなんだ名前だが、兄妹数名は早世しており、物心ついたときには四人の兄と三人の姉だけだった。商売が軌道に乗ると息子に任せる父の考え方により、記憶に残るだけでも十数回転居したという子ども時代だった。

尋常・高等小学校後、琴は奈良県女子師範学校に入学した。友人にも恵まれ、映画や公園散策などを楽しむ一方、四年次の一学期、付属小学校で教育実習を行った。そのとき、大きなプレッシャーを感じた。同年の夏休み、キリスト教の天幕伝道が学校の広場で行われた。好奇心から友人と行ってみた彼女は、「人間の罪と神の赦し」の説教を聞き、「ばんやりしてゐた頭に光を与へられて道がわかつた様な気持と不安な気持」（六三三頁）になった。彼女は、実習時の経験について、自らが罪人であるにもかかわらず「純真な子どもの前に立つのが恐かったのだ」（六四頁）と解釈し、その罪が赦され救われるため、家の近くの奈良ホーリネス教会へ通い出した。そして三か月足らずの十月には洗礼を受けた。

師範学校卒業後、琴は県内の尋常高等小学校に赴任した。実家から遠いので寄宿舎生活だったが二年後に転勤すると、実家から通えた。寄宿舎生活や牧師交替で教会から遠のきそうになったが、一人の長老が重ねて訪問してくれて、信仰を持ち直した。三一年、牧師に見合いを勧められた。二十三歳の琴は、まだ結婚を意識していなかったが、「好きな人というよりは、信仰していくための人」（八六頁）を選び、家族の反対を押しつけ、一度の手紙のやり取りだけで結婚した。彼女はこれを「信仰結婚」と呼ぶ。士族出身ということで身内も認め、翌年四月一日、名古屋で簡素な式を挙げ、新生活を始めた。

夫となった丸山栄は、一九〇七年、鹿児島県の丸山家の六男に生まれた。兄妹の多くは早世した。高等小学校を終えると、実家を離れ大阪の知人のもとで働いた。その後、神戸へ移り、

フリーメソジスト派の路傍伝道でキリスト教を知った。二六年に洗礼を受けた。幾つかの職を転々としながら、やがて牧師を志すに至った栄は、やがて、「行きて戦へ」という「御声」を聞き、困難を乗り越え上京して神学校に通うようになる。だが一年後、信仰に対する考えが合わずに退学し、創設されたばかりの聖書神学院で伝道師の資格を得、三一年、名古屋での伝道を指示され、名古屋聖書教会に赴任した。宣教師たちの伝道が四年近く続いた教会だが、当時の信者は夫婦一組だけだった。その頃、栄へ琴が恩師の牧師を通じて紹介されたのであった。

名古屋市東区で新居を構えた彼らは、月給四十円で生活した(退職前の琴の月給は四十五円)。日曜礼拝出席は、朝夕合わせで多くて十人程度だった。琴の父政吉は三二年に逝去したが、二人は「偶像の前に礼拝を捧げない」という立場を守ろうとして、「焼香」を迫る親族と厳しく対立した。同年には栄の手による初の洗礼式で五人が洗礼を受けた。

所属する日本聖書教会では、「聖霊のバプテスマ」と「異言」が強調される。琴は牧師の妻として生活の日々を送るも「異言」体験がなく、牧師の妻が聖霊を受けていないのは問題だとされ、琴のための祈禱会が開かれた。琴はハレルヤを唱え続け、ふっと意識が遠のいた。気が付くと「異言」を語っていた。語れるようになったのである。

栄・琴夫妻は、二男三女をもうけた(うち一男一女は成人前に逝去)。琴は長男誕生後すぐ尋常小学校へ再就職した。当時の赤貧生活は、断片的に彼らの日記にも記述されている。栄の趣味と実益を兼ねた川魚捕りは食卓に貢献した。琴は三八年に

退職し、その退職金で土地を買い、畑を耕し牛馬を育てるなどした。宣教師とは一度別れ、再度一緒に伝道するも、その時は一年経たぬうちに、宣教師が逝去し、信者数も減った。琴は翌年、再度教員に復帰した。その採用試験で神社参拝に対して反対しないことの念を押されたが、「死活問題だから曖昧に答えたのが苦しかった」(一八七頁)という。栄も生命保険外交員となったが、成績が良く、琴の月給を上回ることもあった。そして再度妊娠した琴は四〇年末に退職し、以後、栄の保険外交員の収入で暮らすようになった。兵役検定が丙種だった栄は、徴用の通知が三度来たものの、一度も行かずにすんでいた。次男が生まれた四三年頃には、名古屋でも空襲が始まっていた。

四四年十月、栄に召集令状が届いた。琴たちのため生活保護給付を申込み、琴の実家へも挨拶し、十一月に出征した。彼は遺書を残していた。それによれば「子等は一人残らず基督教僧侶とせよ」「余の墓は十字架にせよ。汝と墓を並べよ」「神、与へ給へば斯る事の許さるる所に礼拝堂を建て伝導館は町の中にせよ」(二〇四―二〇五頁)と、当時の状況に従った文言のなかにも、彼の意思が見て取れる。同年十二月東南南海地震が発生した。翌年空襲はますます激しくなり、琴は四人の子たちと防空壕に逃げ込む生活を続けた。次男は原因不明の体調不良で病院に行つたところ手遅れだと言われ、その後、一週間足らずで亡くなった。著者とのインタビュでは語られなかったこの出来事を、著者は琴にとつて最もつらい経験だと推察した。

奈良の実母より「帰って来なさい」との手紙が届き、疎開を決断し奈良に戻るも、姉夫婦・養娘の先客があり、母、琴家族

を合わせ八人同居暮らしが始まった。三間長屋の一部屋で終戦を迎えた。

親類がしつかりしているからと生活保護が打ち切られ、ひたすら待っても栄は戻らず、わずかな貯金で暮らしていたところ、琴の許に、四六年四月、栄の戦死の公報が届いた。人前で泣かないようにした琴だが、あるとき、誰もいないとき声を出して思い切り祈った。涙とともに声が大きくなり、「誰のため泣く、栄は神のもとで安らいでいる。子どもたちのためか、『やもめ、みなしごは忘れ給うことはない』と聖書にある」(二一六頁)という声が聞こえた。琴はそのとき、今後、「神が主人栄の代わりに、主人となり養って下さるという信仰が湧いてきた」(二二六頁)という。自ら生計を立てることを決意し、女子青年学校での勤務が始まった。

同居していた姉は四七年三月に逝去し、自らも中学校へ転勤、翌年小学校へ転勤し、そこでは十一年奉職した。

奈良での所属教会選びは簡単ではなかった。独身時代に通っていた教会は閉鎖、栄の所属教派の教会は大阪にしかないため継続的に通うことは困難だった。そんなとき、近所の知り合いに誘われ奈良高畑教会へ行つた。すると、当時の牧師を間接的に知っており、また長老とも旧知の間柄だったため、この教会に通い出した。結局、生涯、この教会の一信徒として信仰を貫いたことになる。アライアンス教会に属する宣教師の伝道で始まったこの教会は、奈良日本協同基督教会と称し、その後、日本基督教団所属として続いた。「四重の福音」を唱えたA・B・シンプソンによって組織化された教派であり、同じく「四

重の福音」を信仰の礎としてきた琴には受け容れやすかったのである。しかし、教団では「異言の祈り」を少なくとも公的には認めておらず、教会等では言うことはなかった。だからこそ、琴は「時と場所をかまわず祈っていた」(二三六頁)のかもしれない。「ただ『ハレルヤ』、『ハレルヤ』と繰り返ししていた」『主よ主よ』とすさまじく響き渡る声で祈っていた」(二二六頁)と記憶する娘たちは、その姿を見て、やがて、信仰を継承していく。二人の娘は中学生になって教会に通い出し、洗礼を受けていった。小学校教員として多忙を極めた琴は、子育てにおいては放任主義を貫いた。「あんたらのことは神様に任せてある」(二三三頁)の言にその考えは集約されている。その一方で、琴は子どもたちに対して「自らの祈りには神は必ず応えてくれる」(二二二頁)という信仰にもとづいて対応していた。その結果、子どもたちは全員信徒になった。長男は高校卒業後、浜松で仕事をしていたが、奈良に戻って結婚し、印刷業社に勤務した。仕事を言い訳に教会から遠のいていた彼は、やがて、自らの病や琴の送迎を通じて、教会長老をも務めるに至った。長女は高校卒業後公務員を経て結婚、教会学校・婦人会などの奉仕を続け、教会長老も務めた。次女は大企業に就職後、保育士を経て、夜学に通い教員免許を取得し、奈良県の採用試験に合格し、小学校教員となった。夫を早世するも、三人の子どもに恵まれ、そのうちの一人は牧師になった(他の一人が著者)。

五一年、琴の母は八二歳で逝去した。六一年に退職した琴は、その後数年間、非常勤講師を続けたものの、多忙な生活か

らようやく解放された。四十年近く牧会していた牧師が隠退し、新しい牧師を迎えた教会で、琴は婦人会員や役員会一員として支えた。教員を完全に辞した六四年から六九年までは執事、七〇年から七九年までは長老を務めた。「退職後の十年か十五年がいちばん楽ができた」(二六〇頁)という語りがあるように、子どもたちが他出し、教員時代の友人や教会の信徒と各地を旅行ができるくらい自由な時間を得たのである。大病後の九〇年には、初の海外旅行として孫が滞在する台湾にも行っている。信仰活動も熱心で、八〇年には、七〇歳前後の婦人会員の「ハンナ会」を作った。礼拝後のストーブを囲む井戸端会議をきっかけに「祈り」を行う会だった。月ごとに祈りの課題を決め、泊まり込みの会なども催しながら活動を続けた。そして、二〇〇八年九月十一日、百歳の生涯を終えた。

とくに評者が注目したのは、琴と栄の受洗、父の逝去、異言、夫を失った直後の四つの出来事である。それぞれユニークな経験だと感じた。また上記は琴の概略なのであえて触れなかったが、時代背景や教派的特徴について、随所で、栄の説教等を通じて描かれていたことも指摘しておきたい。

さて、「近現代におけるキリスト教の実証研究」という観点からの本書を見ると、次の数点で注目されよう。

まず、本事例は戦前のホーリネスの一教派の信者を取り上げており、近現代の日本キリスト教史へ新たな知見を与えてくれる。同時に、戦前戦後のキリスト教界における具体的な信者の動向が示されている。例えば、琴のメモにある当時の説教要旨

「世界を制覇するのは日本である……」(七三頁)から著者は、同時代の状況、ホーリネス教会の立場を考察している。キリスト教史研究自体、深化が進むが、各教派・各教会史ではなく、個人史を辿っても、当時の社会歴史的状況が考察できる一例と言えよう。ただし、名古屋や奈良において、栄や琴が牧会していた時代のキリスト教界や他宗教はどうだったのかなど、評者なら気になる。この記述は少なく、また栄の教会自体も三か月の信者数の推移が示されたに止まり、詳しく知りたかったところもあるが、これは、あくまでも琴が主人公の物語であることを考えるとやむを得まい。教会史あるいは教派史としてはやや限定的記述とも思われたが、同じ対象者を扱ったとしても著者と評者の関心の違いは記述の差を生むことが確認できた。

次に、戦前のある牧師の妻の具体的生活が浮き彫りになった点を指摘したい。信者数が少ない「開拓伝道」のような「赤貧」教会において、妻が経済的に支えた例は、戦後の事例は評者も知っている。戦前も同様に、牧師家族が経済的に厳しい生活を送ったとよく耳にする。だが、このように一般向け単行本で、宗教指導者と配偶者・家族の信念に支えられた暮らしが示されたということは意味あることだろう(同時代的に貧しかった人びとが少なくなかった時代をも示している)。だが、評者がかつて、「プライバシー、経済、信仰継承、役割葛藤」等を(牧師夫人)の抱える問題点として議論したことと合わせて考えると、少なくとも、「牧師の妻として教会と信徒に奉仕し、家では二児の母、学校では先生という多忙な生活が続いた」(二八八頁)琴は、どのような役割葛藤を乗り越えたのか

(そもそもあまりなかったのか)は本書の記述からはあまり読み取れない。すでにその役割を終えて半世紀以上経っていた時点での聞き取りだからか、あるいは、教員としての職業生活に重点を置いていたからだろうか。牧師の妻として他職に就いて家計への貢献は十分果たしたが、それ以外の彼女の教会における役割はやや不明確に感じた(もちろん、文書伝道等は記されている。これも著者と評者の関心の差異ということになるだろう)。

本書最後半は、琴の老年期が描かれている。評者は近年「宗教指導者の老年期」調査を進めているが、琴の歩みを読むと、評者の宗教指導者・老年期仮説モデル(現役↓半現役↓引退)の一典型であったと心強く感じた。すなわち、身体が健康なうちは、外部でさまざまな伝道活動等に従事する宗教指導者(や熱心な信者)たちは、その後、身体が弱くなっても「祈り」を大事にしながらか、生き甲斐をもって日々生きていく姿が、琴の晩年の生活で確認できたのである。著者は「祈りという行為は一見、個人の内面で完結した行為のように捉えられやすい」が、「祈りによって切り結ばれるさまざまな社会的な関係性が示されている」(二六七頁)と、琴の祈りを分析している。評者もこれに全面的に同意する。「祈りは外部に開かれて」(二六七頁)おり、そのことで、身体が自由が利かない状態であっても、人びとはそれまでの関係性のもとに祈り続けていると考えられる。そしてそれは、評者の言葉で言い換えれば「世代間コミュニケーション」の一つと言えるだろう。

次に、ライフヒストリー(＝生活史)を用いた研究として、

本書の意義を二点示したい。

まず匿名ではない個人の信仰生活を示した点である。評者も、これまで何名ものライフヒストリーを示してきたが、いずれも匿名で表記してきた。個人の匿名性に関して社会調査論の分野でも議論されてきた。それぞれに長短があることは改めて確認するまでもないが、近年はとくに、匿名前提の研究が多く示されている。インタビューの現場では調査者・対象者ともに名前も顔も明確に分かっている個人同士で行われるが、それが不特定多数の第三者へ提示される刊行段階で、さまざまな処理でフィルターがかけられる。著者も引用したライフヒストリーの古典「中野卓『口述の生活史』」の主人公内海松代さんも「仮名」であった。本書は、著者の祖母および教会で牧師の妻を務めたという公的性質もあったと思う。それは、より具体的に説得力あると同時に、公表にあたっては、著者の決意(のようなもの)を(評者は勝手に)感じている。

次に、祖母と孫という関係の聞き取りについてである。著者はこれを、「話者が記した文章とそれを解釈した調査者との関係性を含み込んで記述していきたい」(四五頁)と述べている。それも重要な観点だが、本書の戦争関連の記述から、評者は、第二次世界大戦の直接の体験者が逝去していくなかで、後の世代が「戦争体験」を語り継ぐ動向との関連を指摘し、「一世代離れた」聞き取りの重要性を確認したい。直接関係を持つより少し離れた関係のときに語りやすいことは、評者も戦争体験談の中で祖父母世代が孫世代に語る事例や、自分史の記述で「孫たちに言っておきたい」と述べているものを読んだことがあ

る。直接日常的に関わる親子間では、戦争体験のような悲惨な体験を語ることはできず、むしろ一世代空け、ある時期を経て語るということである。今回の琴の語りは、まさに孫だから聞き取れたということもあるのではないか。そして、同時に子世代（著者の親世代）への聞き取りも十分なされており、記憶の齟齬などの箇所を並列させることで、語りの差異を、あえてそのまま提示することで、今後の読者たちによる分析にも役立つと思われる。

なお、些細なことになるが、一読者としては、五二―五三頁のような詳細な家系図とは別に、琴および夫の栄の親族を含めた登場人物が明確に分かる簡略化した人間関係図および、琴に関連する略年表があれば（本書4・5章を読み進めるときに）、より分かりやすくなっただろうと思った。

さて、上記のように、本書の貢献は多岐にわたる。引用していただいた拙著刊行後、この方面でまとまった成果を示せていない評者には、まさに叱咤激励を受けた気がしたと正直に述べなければならぬ。民俗学・文化人類学を専門とし、口頭伝承や祭礼行事研究等で重要な成果を挙げてきた著者が、分野を超えた形で本書を刊行するまで、女性のキリスト者の生活史が、（個別教会史の一部や逝去後に著される記念誌等以外に）このようにまとまって（一般読者を想定して）示されたことはほとんどない。著者と琴さんに心より感謝したい。

櫻井治男著

## 『地域神社の宗教学』

弘文堂 二〇一〇年一月一五日刊

A5判 viii+三八四+ii頁 五〇〇〇円+税

由 谷 裕 哉

本書は、『蘇るムラの神々』（大明堂、一九九二年）に続く、櫻井治男氏（一九四九年生まれ、皇學館大学教授）の二番目の単著である。

構成は全四編からなり、第一編の前に全体の構成を位置づける序が置かれている。以下に、章のサブタイトルを省略したうえで、構成の詳細を示すことにする。

### 序

第一編 近代日本と地域神社への視角

第一章 近代日本の神社信仰と地域社会

第二章 明治初期の「神社」調べ

第三章 明治初期の「神社」調べと地域神社

第二編 神社整理と地域の神社復祀

第一章 「家郷」をめぐる地域神社と共同性

第二章 神社合併と稲荷社

第三章 地域社会の変動と宗教伝統